

玄言詩と山水詩における「哲理」と「情」

佐竹保子

王瑤 1956 は、劉勰の「老荘が退き、山水が盛んになった」という説を批判して「詩人達の思想や宇宙・人生への認識が変わったのではなく、媒体・題材の変化にすぎない。……『老荘』はじつは『退』いていない」と記し、曹道衡 1961 や林文月 1967 もほぼ同じ認識を示した。だが志村良治^{しむらりょうじ}1973 は「王瑤氏の意見では、玄言詩から山水詩への変化は、題材の転換であり、思惟の構造においては異ならぬとされる。……しかし、じつはここに質的転換が行われていると私は考える」と異議を呈した。

じつは錢鍾書 1948 が「近代の沈子培が劉勰の説を非難した」と記すとおり、王氏以前に沈曾植が劉勰説を批判している。だが沈説はむしろその後の「支遁と謝靈運はどちらも禅学と玄学に拠り、支は玄学を、謝は冥(仏学)を好んで語り、これが二氏の自得の趣旨であった。謝はなお物を意識しないことに拘泥したが、支は恬淡として道にかなっていた」が注目される。

本発表は、玄言詩と謝靈運詩と違いを整理した後、両者における「情」と、詩の最後の部分に着目する。玄言詩は、「情」を「暢」^のばすことで「憂」を消すと詠じるが、支遁詩のみ、「情」は「仏」に属さず、無くすべきものとする。謝詩は、「情」を「遣」^{わす}れば山水美を正しく見ることができ、「理」によって「情」が無くなる、という。謝詩の「情」は、支遁詩、慧遠・竺道生・宗炳の文章、および竺道生・仏駄跋陀羅・鳩摩羅什の漢訳仏典中の「情」に共通する。また詩の最後で、支遁詩を除く玄言詩ではおおむね「適」(自得)に至るが、謝詩では往々それが果たされないことを嘆く。

謝詩の山水詠は彼なりの仏道修行の記録であり、最後の部分はその信仰告白だったのではないか。